第２回守口市義務教育諸学校教科用図書選定委員会

日時：令和元年７月１１日

開会：午 前 ９ 時 ３０分

【国語】

＜委員長＞　それでは御意見を頂きたいと思います。

＜委員＞　５、６年生が一冊の発行者と上下２冊の発行者がありますが、内容量等は２冊の方が豊富であるようなことはありますか。

＜委員長＞　事務局どうですか。

＜事務局＞　ページ数になりますが、選定資料から、例えば東京書籍でしたら５、６年生は１冊ずつで、５年生で３０６ページ、６年生で３０６ページ。府の選定資料の方を御参照いただければ、ページ数等が記載してあります。

＜委員長＞　総ページ数でいくと、学校図書と教育出版が２冊に分かれていて、２冊に分かれている分ページ数が多く、５年生と６年生が１冊になっている東京書籍と光村図書はやや少なめかということになりますね。２冊に分けた部分で重なる部分があるので、その分、ページ数が多いんだろうなという気はします。

＜委員＞　そんなには変わらないですか。

そんなに変わらないのに、重たいなと思って。少しでも軽い方が、子供たちにはいいのかなと思いますね。

＜委員＞　私から、基本的な視点の三つ目である自学自習力の育成につながる教科書ということで、読書のことで、少し話をさせていただきたいと思います。

まず、今見ていただいている選定資料の２１ページの一番下の図書館及び情報機器活用と漢字学習の取扱数を紹介している図書のところですが、図書数については東京書籍が一番多くて５０８紹介し、次に光村図書が４５６です。

次に光村図書の６年生２６５ページを見ていただきますと、光村図書はこ記載のような形で図書を紹介されています。大変整理されていると思いますし、その前の２６４ページでもデジタル機器を使って、プレゼンテーションをしようと書かれています。

東京書籍の方も同様ですが、調査書にありますとおり、３年生の上の１０２ページを開けていただきますと、「本は友達」というところがありまして、「心の養分」ということで書かれているんですけれども、次をめくっていただくと、また本の一覧表が出てきます。

守口市の子供たちは、読書の方が、なかなか家庭学習として難しいというところがあるので、このように紹介するものが多い方がいいのかなというふうに思っています。

＜副委員長＞国語というのは、単元を通して、どういう力をつけるのか。ゴールを明確にした中で、子供たちが見通しをもって学習していくことが、とても大事になります。その見通しを持てる手だてを非常に書かれているのは、光村図書の４年生の上７８ページなんですけれども、「一つの花」とい教材７８ページに、見通しを持つように単元の流れ、とらえよう、深めよう、まとめよう、広げようと、「こういう学習をしていくんだよ」というのが、子供が見てもわかりやすく書いていますし、ノートの取り方なども、下の段でヒントになるような手だてが書かれているので、子供たちが授業をする上でとてもわかりやすいかなと感じています。

私は、全部４年生で見たのですが、東京書籍は、ノートの書き方を明確に書きあらわしています。４年の上の２６ページ、国語ノートの書き方ということで、具体的に日にち、めあて、今

日の勉強することを四角で囲む。そして、最後の自分の「今日のまとめ」ということで、こういうふうに書かれている教科書は、なかなか珍しいなと思っています。これを学ぶことによって、学校として、同じような国語のノートの書き方等を系統的にできるかなと思います。非常に工夫されていると感じました。

＜委員＞　今の御意見にも関連するのですが、学習の進め方のところを見ていまして、光村図書の５年生２３８、２３９ページ。同じ教材を扱っている教育出版の５年生の上１０２、１０３ページ。これはどちらも「大造じいさんとガン」の学習の流れですが、調査書にも書かれてあったのですが。例えば一番後の「広げよう」というところを見ますと、光村図書の方は、「友達は物語にどんな魅力を感じているのだろうか。自分の考えと比べながら読み、感じたことを伝え合おう」。それと、例えば教育出版でいくと、「友達と読みあいましょう」というところで、今後これから大きな流れは変わりませんが、主体的で対話的で深い学びの授業改善を進めていく上で、先生方が子供に教えるときに、いろいろな活動の視点をここで例示されているということは、教員にとって非常に安定的に、また、全ての学校で安定的に学習が進められるんじゃないかなというふうに感じました。表現としては、光村図書の表現はいいかなと感じました。

＜委員＞　私、見方が違うんですけれども。光村図書の教科書は、池上彰さんが関わっているという話があるのと、５年生の２５１ページに点字があるというのと、後１２４ページに、今はやりの漢字クイズがあったりとか、光村図書の５７ページのところで、私はとても好きなんですけれども、５７ページを見ていただいたら、原因と結果というのがあります。世の中に出たら、すごく大事なことで、何でこうなって、何でこうなったかと、本当はこの後に何を考えて、どう自分はアクションを起こすかというのがあります。そうしますと、原因と結果というのは、文字にして書いてあるのが、ここだけだったような気がしましたので、いいかなと思いました。後、６年生の教科書の一番後に、初めて見たんですけれども、表彰状がついているんです。これも最後に子どもが面白いと感じると思います。３０６ページです。「自分の好きなの書いて」と言って、最後の最後に笑いがありますね。

＜委員長＞　点字については、教育出版４年生の下９７ページにも載っていますね。

＜委員＞　東京書籍は、昔からあるような、すごく真面目だなと思ったのと、作成に関わっている先生が大阪の先生が多いなと思います。印刷の加減かもわかりませんが、とてもビジュアルがきれいだと感じました。あと内容よりも、どうしても外見を見てしまうんですが、教育出版のは表紙がすごくきれいで、学年によって四季があるというのに気づかれましたか。夏と桜と春とあって。これ横に並べるとストーリーがあって、最後６年生が大人になって旅立つとか、５年生のときは、今風のアニメっぽくしてあってよく考えておられるなと。発行者の姿勢が。６年生の下はすごくきれいな星空だなと思いました。教育出版の６年生の上巻は、すごく全体的にいいなと思いました。毎回こうなのかよくわからないですけれども、この表紙はなかなか考えておられると思いました。

＜委員＞　委員の方からありました今後は情報というのが大事だと思いますが、学校図書の６年生の上４２ページを見ていただいてよろしいですか。ＡＩで言葉と向き合おうと。ＡＩは、今後の社会に必要だということで、それを文章として、ここで子供たちにしっかりと考えさせようという学校図書の意図が伝わるなというふうに思います。でも、先ほどおっしゃったように、光村図書は情報という形でプランをつくって、計画的にやっておられるということです。

＜委員長＞　府の選定資料でいくと、「読むこと」については、光村図書が一番多い。守口の子供は、どちらかというと説明文を読むのが苦手です。なおかつ、それをどう考えていくのか難しいというのが、１０年前ぐらいからの課題ではありますので、それが一番より多く取り扱われているというところでは、他もそれほどに大きな差はないですけれども、いいのかなということが一つ。後、前回

の教科書の改訂から、スパイラルというのが言われてあり、学び直しというのがありまして、多分５・６年生の教科書が２冊を１冊にしているのかなと。分けてしまっていると、前半やった部分が振り返りというところで、本の題材に出されていたり、「あそこの本、書いてあったよね」というのが、振り返ることが、なかなか難しいのかなという意味合いもあって、重たいのを覚悟して、ここの二つは５、６年生は、１冊にわざとまとめているのかなというような感じがします。体格も大きくなっているので。ただ、重たいのは重たいですけれど。それをどうとるかということですけれども。意図的には、そういうことも加味して、わざと分けていないのかなというふうには、私自身は思っています。

＜委員＞　諮問の方に、本市の特色を活かせる教科書という点があって、そのうちのＩＣＴ機器が整備されているのも本市の特色の一つかと思います。学校図書と光村図書には、ＱＲコードが示されていまして、これは非常に子供たちが簡単に、画像とか見やすい工夫がされているなということは思いました。

＜委員長＞　後の２者はＱＲコードじゃなくて、印があって、前の方にＱＲコードが載っていて、そこから一括まとめで調べるというパターンでしたね。

委員は、都度都度でＱＲがある方が、わかりやすいという御意見なんですよね。

＜委員＞　はい。

＜委員長＞　もう４つとも全部ネットを調べればできるようには、なっています。

＜委員＞　ＱＲコードはありましたっけ。

＜委員長＞　いや、印が打ってあるだけで、一番前のページにＱＲコードがあって、そこを選択すると取りまとめたものへとぶようになっている２段構えなんですよ。

＜委員＞　これは、学びのリンクっていう学習ページにとぶということですね。

＜委員長＞　直接、該当ページからみるか、一括してみるかということですね。委員さん、教材はどうですか。

＜委員＞　東京書籍の６年生１３８ページにある「まちの未来を描こう」プレゼンテーションを最終的にはやる形です。これを読んで、自分のまちにどんな形をつくっていくというのが面白いなと。中学校にもつながっていけるんじゃないかと思います。また、教科を横断的になれる、そのような内容じゃないかなと思いました。

あともう一つ面白いと思ったのは、光村図書６年生で、先ほども言われましたが、池上彰さんのところで、コミュニケーション能力を高めるのが本当にいいと。これからの時代、未来のことについても考えられるような教材が入っている。またさらに、古典とか、日本の文化を親しもうというような形で、出てくる教材がいいかなと思いました。

＜委員＞　今の委員のつけ足しですが、東京書籍は「言葉の力」ということで、これも本市の子供たちにとって「言葉の力」というのは、大事だというふうに考えていますので、見やすいなと思っています。

＜委員＞　東京書籍は、字も大きくて見やすいなという感じ。６年生だったら、結構図書館に行って、実際に本を借りて調べようとか、利用方法の仕方とか、調べるということをします。そのことについて書いておられるのがいいなと思ったのと、学校図書は、字が少し小さいなと感じました。私は勉強のことがわからないですけれども、結構子供って、表紙であるとか、パッと見た感じから入っていく部分もかなりあると思います。好きな教科書、嫌いな教科書みたいな感覚でとらえる部分が、小学生は特にあると思うので、字が少し小さいなと感じたのと、光村図書は、中の挿絵もきれいでした。

教育出版は、自然に対しての題材が多いなと思いながら、全体を見させていただいた感じです。

＜委員長＞　教育出版は、先ほどの表紙の話とか、自然とか、こだわりをもっているかもしれないですね。

＜委員＞　目を引きますね。小学生の子供たち、特にかわいい教科書をすごく大事にするので。表紙がきれいとか。

＜委員＞　物を大事にしてもらえるし、並べたら５年、６年と四季になっているので。

＜委員＞　どこで気づくかですよね。残しておいてくれるお母さんだったら、横に並べられますけれどね。

＜委員長＞　子供たちは、１年１年しかもらわないので。結局これがシリーズになっているのがわかるのは、６年生になって、しかも教科書を捨てずに全部残していて初めてわかる可能性があります。１、２年生では、まず気がつかないというところでしょうね。

＜委員＞　最初に言ってあげるんですかね。「期待して持っときや」で大事にしてくれるかもわかりません。

＜委員長＞　それを１年生のところで言うのはなかなか難しいところがあるかもわからないですね。
いろいろと御意見いただく中で、中身の話や見た目等、子供にとって「これはいいよね」という話で、論議をたくさん頂いたと思うのですが、全部特色があって、全て検定を通ったいい教科書の中で、あえてそれを答申するために、分けていかないといけませんので、今聞いていた御意見の量とか、そういったものを加味して、意見としてまとめさせていただいてよろしいでしょうか。
（「はい」という声あり）

＜委員長＞　それでは、国語につきましては４者あります。「最もふさわしい教科書」に光村図書と東京書籍で、「よりふさわしい教科書」というところに、学校図書、教育出版というふうに、二つ二つということでいきたいと思いますがよろしいでしょうか。御意見ないようでしたら、これで答申したいというふうに思いますがどうでしょうか。
（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　それでは、異議なしという声が聞こえましたので、国語については、これで終了したいと思います。

【書写】

＜委員長＞　それでは、御意見の方よろしくお願いいたします。

＜委員＞　報告書でも一番の評価があったのが光村図書のようで、私も見させていただいて、１年生の部分でも初めの方は、書くことに慣れるというところから入っているのが、すごくいいなと思いました。表紙をめくってから、絵や文字がごちゃごちゃしているよりは、まず「書くことに慣れていきましょう」という姿勢が見られました。本題の書く部分まで、かなり練習させてから書かせているなというのをすごく感じたのでいいなと思いました。
あと６年生に書写ブックというのが、最後の方に小さいのがついているんですけれども、手紙の書き方であるとか、大人が見ても勉強になるようなことが書いていましたので、持って帰りたいなと思うような部分がありました。次中学生に上がる段階で、こういう勉強をさせてもらえるというところがすごくいいなと感じました。挿絵とか、全てきれいなんですけれども、易しい段階から入っていってる部分が気に入りました。

＜委員＞　毛筆ですけれども、こういうふうに光村図書ですと、右に説明があって、左にお手本があります。調べましたところ、光村図書と同じように右に説明、左にお手本があるのは、東京書籍と日本文教出版と、光村図書の３者。後は右にお手本があって、左に説明。これは学校図書と教育出版。どちらがいいのかなというのは、調査員の報告の中で、光村図書のところにあるんですけれども、右に説明、左に手本という形で、説明でしっかり読み取ってから、左の手本に移るというのが、特筆すべき事項で出ていましたので、そちらがあっているのかなと思いました。

＜委員＞　６年生の書写を見ていたんですけれど、学んだことをどうやって活かすかというところで、東京書籍６年生２４ページのところに、こういう「ポスターをつくっておきましょう」のところ、壁新聞的なものが書かれているんです。ほかの教科書にもいろいろあったのですが、習ったことをどのように使うかというのを書いているという教科書がいいなと思っています。後、同じ東京書籍の３６ページですね。それを使って「みんなで展覧会を開きましょう」ということで、具体的に習ったことを出し合うというようなことまで書かれています。学んだことを活かすというのが大事かなと思いました。

光村図書も、さきほど委員からありましたけれども、書写ブックというのは、これも習ったことをどうやって使うかというのが書いてありまして、ここにも新聞の書き方とか、ポスターをつくるときの工夫等あったのがよかったと思います。

日本文教出版は、６年生で４２ページ、４３ページのところで、ここも手書き新聞なんですけれども、４３ページの寄せ書きの書き方まで書いていて、「卒業に向けてこんなんしたらどうですか」「消しゴムで判こをつくろうよ」みたいな、少し斬新な切り口かなと思って。必要かどうか、少しわからないですが、このようなことを書けば、なかなか書写に親しみにくい子どもも想像できるのかなというようなことを感じました。

＜委員＞　学校図書の６年生３８ページから３９ページを見ていただきたいのですけれど、今学んだことをどう活かすかというお話がありましたが、書写の資料館というのが、どの学年にもあるのですけれども、左側は都道府県名を書こうということで、実際に４年生が都道府県を漢字で書くようになっています。このように国語のことも意識してやっておられるというのがいいかなと言うふうに思います。

＜委員＞　教科書のサイズが少しずつ、みんな、違うんですけれども書写については。こういうのは別に決まっているものですか。

＜委員長＞　それは、教科書発行者が自由に決めていますので。

＜委員＞　子供たちは、これが入れにくいとか、持ちやすいとか、あまりないですか。東京書籍は横に広くて、これぐらい差があるというのは、教科書をそろえて、角をそろえてとか言われてる子供もいるみたいで、そんなのができないなと思いました。

＜委員長＞　年々、ランドセルは大きくなって、昔はＡ４ファイルが入らなかったのですけれども、もう今は、大抵Ａ４ファイルがすぽっと入れることができるようになってきて、東京書籍も、普通のランドセルに入るサイズを研究されているかなとは思います。

あと、災害を忘れないという意味では、壁新聞とかの例を、どの教科書も見たんですけれども、やはり東日本大震災の避難所での連絡情報とか、去年も北部地震とかあって、守口市も今後東南海地震とか、どういうことが起きてくるかということを考えたとき、そういうことを忘れないという意味では、避難所のこととか、それを踏まえた書道と言いますか、字を書くということを使っています。その点からは、守口の子供たちに、それを思い出してもらおうという意味合いでは、そのような題材を使っているということは、同じポスターとか壁新聞を使うにしてもいいことだなというふうに思いました。

＜委員＞　少し私も今の意見に関連するのですが、光村図書、全ての学年なんですが、いろいろ学んだことを生活につなげようという工夫のところで、実物が本題に使われていて、子供たちは非常にイメージしやすいんじゃないかなと感じました。

＜副委員長＞私も光村図書の「新聞記者になろう」という、すごくインパクトもあるし、特に高学年になると修学旅行に行って、平和学習したりと、大きな新聞づくりってとても大きくて、５年生も今、ＮＩＥで新聞から学んだことを自分たちで見出しをつくるというのがあるので、とてもこういうこ

とは、生活に結びついていける書写かなと、いいなと思います。

＜委員＞　日本文教出版の１６ページ、１７ページの６年生なんですけれども。ここに漢字の始まりというのが載っていますが、パッとこれをみて、中国から伝わってきたんだとか、こういうのが小学校の社会科の教科にも少しつながっていますし、中学校でもこれが話されます。これを見て、面白いなと思いました。「もともとは甲骨文字から始まったんやで」とか、そこから漢字が中国から日本に伝わったと、こういうことでも歴史がわかる、深める学習もできるんじゃないかなというふうに思って、面白いなと思いました。どこの教科書も歴史のことは、載っているんですけれども、ここが一番大きく載っていたかなと、わかりやすかったかなというふうに思いました。

＜委員長＞　今見ている、同じ６年生の書写の２６、２７の目的にあった筆記具の中で、いろいろな紙が紹介されているのも、面白いなと思います。書体だけでなくて、紙も紹介されているのは、また面白いかなと思いました。

＜委員＞　教育出版ですけれども、５年生の先ほども各教科との兼ね合いでというお話が出ていたんですが、例えば２０ページに自動車工場でのメモの取り方が記載されています。実際に社会とリンクさせて学習を行ったり、その後、３０ページには「委員会のポスターをつくろう」ということで、そういう普段の各教科との連携というところも教育出版の方では、見られるかなと思います。

＜委員長＞　よろしいでしょうか。そうしましたら、御意見も出たと思いますので、私の方でまとめさせていただきたいと思います。

それでは、書写は５者ありますけれども、御意見の出た量とか、その辺り等を加味しながら、「最もふさわしい教科書」については、光村図書と日本文教出版、「よりふさわしい教科書」に東京書籍、「ふさわしい教科書」に学校図書、教育出版という形で、この５つを分類させてもらおうと思いますけれども、御意見ありますでしょうか。よろしいですか。では、書写は終わりたいと思います。

【社会】

＜委員長＞　これから社会についてのご意見を頂きたいと思います。

＜委員＞　まず日本文教出版なんですが、調査事項の方にもあるように、写真資料が多いというのが意見としてあったと思います。例えば４年生４４ページを見ていただいてよろしいですか。調査事項からは、大阪府や近畿について、大阪府に住む人々が使う水ということで、扱われているところです。このように身近なものが使われているというのが日本文教出版です。６年生の１５４ページから１５５ページ、どこでもいいんですけれども、ここがわかりやすいので、開けていただけたらと思います。ほかの教科書と少し書きぶりが違いますのが、例えば１５４ページであれば、「まず調べてみることにしました」という述語で終わっています。次に、「調べて話し合いました」ということで、子供たちの学習の流れが、調査事項の方には、結論を示さずに、こういう書きぶりで終始統一しているというところが、子供たちにとって学習がしやすいのかなというふうに思います。

＜委員＞　３者全部６年生で同じ場所を調べてみたんですが、教育出版は１１０ページ。文教出版では１０２ページ、東京書籍では５０ページ、頼朝のところを全部見て、日本文教出版だけは、文字は小さくなっているんですけれども、調べ学習ができるような形で取り組みがなされているなと思います。こういう形で子供たち、教師が教えるような授業ではなくて、調べ学習を入れながらの授業になっています。これは、なかなか斬新で面白いなというふうに思います。今の主体的な学習につながる教科書じゃないかなというふうに思いました。

＜副委員長＞ちょうど世界遺産になった堺市の古墳のところを見ていました。日本文教出版は、６４ページで、教育出版が８４ページ、それから東京書籍が１８ページです。先ほどおっしゃったように、日本文教出版の場合は、女の子が大きな疑問として「なぜ、こんなに大きな古墳をつくったんだろう」と指し示している言い方が、子供に沿っているなという感じで、男の子と女の子が何かヒントになるような言葉を「古墳には、きらびやかな飾りつけをつけているね。何でだろう、何でだろう」というとこら辺で、「じゃあ、自分で調べてみたいな」というふうに学んでいってるなというふうに思いました。

古墳のつくり方についても、日本文教出版は、「こんなに人がいてどうやってつくったか」「その人がどう関わっていったのか」「非常に大変だな」とか、何か、にじみ出ているなということで、すごく子供たちにわかりやすいかなというふうに感じました。

＜委員＞　私は６年生の歴史で、聖徳太子のところをざっと並べて見ていたんですけれども、出発の発問。問いかけなんですが、例えば教育出版は、「聖徳太子はどのような政治を行ったのだろう」東京書籍は、「聖徳太子が行った政治について、整理し、学習問題をつくりましょう」最後に日本文教出版は、「どうして大きなへらがつくられたのだろう」ということで、その３者を見たときに、日本文教出版は、子供の視点からの発問で、学習が始めやすいような工夫がされているように感じました。

それともう一点、教育出版６年生の同じく聖徳太子の９３ページですが、聖徳太子調べということで、歴史人物調べの一つのまとめ方が紹介されているんですが、時代背景が目指したこと、それが幹になって、行ったことを枝に書いて、最後その結果をついた葉のところであらわす。一つこういう、まとめ方という例示は、いろいろな場面でも子供たちが使っていける参考になるのかなというふうに感じました。

＜委員＞　東京書籍は２冊に分かれいて、いいという意見もありますが、もともと歴史と国際政治って本来は、話がリンクしているようなこともあるので、分ける必要はあるのかなと思いました。分かれて持ち運びが楽という意見もあったみたいですが。一緒の方がいいんじゃないかなと私は思いました。東京書籍のところは、ドラえもんがポイントで抑えているようなところがあったので、子供たちは、目が行きやすいのかなという感じはしています。あと、日本との国際的なつながり、「日本のつながりの深い国々」というのが３者ともあるんですけれども、その中で、教育出版は、２３５の右端にあるようにインデックス方式になっているので、これは工夫されているなというのは思いました。

展示会の意見の方を参考にして、見させていただいたときに、日本文教出版の２００ページのところに、南京大虐殺のところに日本が悪いと書いているのを見たときに、明確に記述しているというのを書いてあって、少し読んだんですけれど、これは、どうなのかなと少し思いました。

＜委員＞　私も一緒で、委員が言われたみたいに、戦争のときの背景のことであるとか、かなり大変なことが、現実私自身がその場にいないのでわからないので、この書かれ方に関して、どうなのかなと思います。それぞれの発行者全てに書かれている部分があると思うんですけれども。国の検定を通ってこられているので、それは認められている記述なのかなとは思いますが、書き方の違いみたいなのが、少し比較できたらなと思いました。

今、国際問題でも結構、韓国であるとか、中国であるとか、日本バッシングみたいなのが、かなりあるので、子供時代にこういうのを目にしたことによっての影響力みたいなものをすごく感じてしまうので、その記述の違いで真実を曲げてしまっては、いけないと思うのですけれど

も、その部分が余り誇張されていないのかなというは、すごく思いました。加害者意識というんですか、それを逆に持つこともないのにな、というのも少し感じました。

＜委員長＞　そこは、社会の教科書をつくる上では難しい。国も検定を通す上では、いろいろな意見が出て、修正等とかもあった部分もあるのかもしれないですが、最終的には、皆検定を通っていますので。

＜委員＞　そうですね。通っていますからね。

＜委員＞　拉致問題の教科書の記述を見させていただいたんですけれども、例えば日本文教出版６年生２２３ページ、教育出版の６年生２２６ページ。それと最後に東京書籍の６年生１５３ページを見比べていただきますと、基本、写真は日本文教出版と教育出版は、同じ会議の様子。東京書籍は、北朝鮮から帰国した拉致被害者がおりてこられる様子を載せています。中身の文章を見ましたが、大きく変わりはないかなと思います。

＜委員長＞　私からは、日本文教出版の６年生、世界の中の日本ということで、最後まとめておられます。例えば、２４４ページ「子供たちの様子は」というところで、特化して書かれておられたりとか、いろいろ交流の場面ですね、海外の人たちの交流とかがあるみたいなので、子供目線に立った交流という部分でいけば、ほかの国の様子とかありますけれども、そういうところは、このような目線があるという部分で、いいのかなと思っています。

後は、先ほども委員がおっしゃっていましたけれども、６年生の担任の先生が教える上でやはり２冊に分かれていることがいいのか、悪いのか。中学校になったら公民とか地理とか全部分かれるんですけれども。それを小学校の段階でパシッと６年生の担任が切ってやるというか。もしくは、２冊もっていかないといけない話になったら、結局重さは一緒になりますので、そこの論点は難しい話かなと思っています。

府の選定資料でいくと、教育出版が一番ページ数をさいています。社会科でいくと資料が多かったり、ページ数をさいているというところは、３年生とあわせたらページ数が多いということは、いろいろなデータが載っているという意味合いでは、一番教育出版が、一番ページ数が多いところですね。

＜委員＞　今おっしゃった、教育出版３年生最初の１ページ目、今まで１・２年生は生活科で学んできて、社会科が３年生で入ってきます。当然、社会科の見方や考え方というのが生活科とは変わるわけです。これを見ますと「生活科を振り返ろう」これは、どの者もあるんですが、次をめくっていただきますと、「社会科の学習の進め方」「社会科の見方や考え方」ということで、より今まで１・２年生の生活科とは違って、統合するとか、関連づけるとか、３ページに書いてあるこういう見方が大事になってくるということで、子供たちも、教員の方もすごくわかりやすいかなと思います。

＜委員＞　５年生の自然災害のところを見ました。３者ともに大体、学習形態としたら、日本で起きているこれまでの災害の紹介であったり、その国レベルのものを含めた防災の対策を調べて終わるとなっているんですが、最後にもう一度調べた上で、自分の命を守るためにどういうことをし、最後、自分の命につなげられているのは、日本文教出版だけかなというふうに思います。それは、非常に学習の流れとしてはいいかなと感じました。

＜委員長＞　では、まとめたいと思います。社会科につきましては、３者が出ております。いろいろ御意見等も出てきたわけですけれども、御意見の量であるとか、中身とかを判断させていただきまして、社会科につきましては、「最もふさわしい教科書」ということで、日本文教出版と教育出版で、「よりふさわしい教科書」ということで、東京書籍というところで３者を分類したいなというふうに思いますが、御異議ありませんでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　よろしいですか。それでは、社会科を終了したいと思います。

【地図】

＜委員長＞　それでは、地図について御意見をよろしくお願いします。

＜委員＞　２者見たところ、地図の中の字が見やすいのは、特別支援教育の視点からユニバーサル的なものを意識されていると思うのですが、私は東京書籍の方が字の方は、見やすいという印象を受けました。

＜委員＞　続けてよろしいでしょうか。帝国書院の４６、４８ページ。この京阪神の大きな図、マークのところで守口市の中に庭窪であったり、鶴見緑地であったり、ひらかたパークなど、少し身近なところが示されていますので、親しみを持ちやすいかなというふうに思いました。

＜副委員長＞一番見開きのところが、どちらも世界地図だと思うのですけれども、帝国書院の方は、「こんにちは」という挨拶があるんですね。うちの小学校は、外国にルーツのある子が多数います。一番何を学ぶかといったら場所と挨拶ですね。そういう子たちにとっては、すごくうれしいだろうなと思いました。また、東京書籍は、とてもかわいいのだけれども、挨拶すなわち言葉ってとても大事なので、そこがいいかなと思いました。

＜委員＞　私も帝国書院が見やすいかなと感じました。あと、日本で起きた自然災害９１ページのところであるとか、東京書籍も最後にあるのですが、日本全体で起こったことが載っていたり、３０ページ日本固有の領土がはっきり示してもらっています。海に囲まれた国なんですけれども、それぞれ東西南北、一番端っこの表示も結構知らなかったり、私も今日地図帳を見せていただいて「そうなんや」と学習になった部分がありました。１０１ページにも歴史とも重ねて、世界文化遺産の紹介をしてもらっていて、いろいろな部分から興味を持てる地図帳であるのかなと思って見せていただきました。

＜委員＞　後ろの方ですけれども、統計の資料というのがあって、子供のころ大好きだったんですけれども、どこの県と何が違うのか、人口が多いとか、よく比べていて、国の違いって、何を輸入して何をつくっているのかと書いてあって、これが大好きでよく見ていました。帝国書院の方は、ふるさと自慢と書いてあって、いろいろなことが書いてあるんです。東京書籍の方は、主な郷土料理とかが書いてあって、同じような書き方なんですけれども、帝国書院の方がよりわかりやすいかなと思いました。帝国が１０３で、東京書籍が８３ページのところです。文字は、東京書籍の方が見やすくていいんですけれど。内容的には、帝国書院の方がいいかなと思います。下にリンゴは青森が５８．５％とっているんだなというのが書いてあって、ビジュアルもいいなと思いました。先ほどありました、世界の挨拶でこれは、絶対にいいと思います。地図帳にこれが載っているのは、すごくいいなと思いました。

＜委員＞　すごくグローバルです。

＜委員＞　地図は全世界共通なので、文字が違えどと思いました。

＜委員＞　今のグローバルということで、調査報告書にもあるんですけれど、帝国書院の７５、７６ページからずっと、その国の文化、世界、子供たちという形で掲載されています。これも守口の子供たちがいろいろな国の文化があるんだなということを学ぶきっかけになればなというふうに思っています。あわせて、これは東京書籍なんですけれども、４７ページに大変見づらいんですけれども、調査報告に書いてあるとおり、東京オリンピックの予定地ということで記載されていますので、来年度、この教科書を子供たちが使うことに４年間なるんですけれども、子供たち国際的なことにも目を向らけれる、きっかけになるかなと思います。

＜委員＞　帝国書院のところの９ページに、「地図の約束」というのが載っていまして、これは東京書籍には、全然載っていなかったので、これが面白いかなと思いました。後、帝国書院の後ろの方１１５ページに「４７都道府県のここに注目しよう」という形で、面白く子供たちにクイズ形式みたいな形で問題みたいなのが載っているのが面白いかなと。また、１１７ページにも地図のマスターへの道と、まとめの塗りつぶしという形で、自分でここまで理解したなということで、子供たちに取り組みやすいような形でつくられているので、面白いなというふうに思いました。以上です。

＜委員＞　歴史との関連のところで、東京書籍は７５ページ、帝国書院は１０１ページからですが、東京書籍の方は、日本の歴史、世界とのかかわりということで、もちろん年表に関連ページが示されることに加えて、その時代、その時代の世界と日本の関係が２ページにわたって、丁寧に記されています。帝国書院の方は、年表がありますが年表での関連というところに絞られているので、歴史との関連でいうと、東京書籍の方が充実しているかなという点があげられます。ただ帝国書院は、世界文化遺産の実際の写真をざっと並べられているのが見られるなというふうに感じました。

＜委員長＞　いろいろ御意見が出ていますけれども、先ほども出ました日本で起きた自然災害の部分のページ、東京書籍は９８ページ。帝国書院が９１ページ、東京書籍の方が、どこで何が起こったかというのが、矢印で入っているのが見やすいなと思います。帝国書院は記号が書いてあって、記号から右左にいかないといけないので、子供たちにとってみたら、どちらの方が見やすいかなというふうに思いました。

そうしましたら、一番初めのお話の中で、最もよいものを複数選ぶということで、いろいろな意見が出たと思いますので、地図につきましては、東京書籍と帝国書院ともに、「最もふさわしい教科書」ということに入れさせていただいて、答申をさせていただきたいと思います。

第３回守口市義務教育諸学校教科用図書選定委員会

日時：令和元年７月１６日

開会：午 後 １ 時 ３ ０ 分

【算数】

＜委員長＞　それでは、始めたいと思います。

順番は問いませんので、御自由に御意見をお願いいたします。

＜委員＞　どの発行者でもやはり学習内容もさることながら、学び方というのが新学習指導要領で特に強調されています。どの発行者もそれなりに学び方というのをかなり工夫されていらっしゃると思います。ただ、少し申し上げたいのが、例えば東京書籍、この調査事項の中にもありますけれども、二つめ、めあてと、まとめが毎時間分書かれており、児童が主体的に取り組むことができ、授業者にとっても授業の見通しが持ちやすいというふうに書かれていまして、本市でもめあてを書く、振り返るということを強調していますので、この辺はいいかなというふうに思います。１年生が少し大判になっていて、とても見やすいなというふうに思います。また、学校図書につきましても、めあてについてでございますが、知りたい、考えたい、確かめている等、そのようないろんな子供たちのつぶやきみたいなものを学習の流れで入れていって、大変学びやすいなというふうに思いました。

最後に、教育出版。振り返りというところを漫画でわかりやすく説明しているところで、ぜひ見ていただきたいと思うのが、２年生の上８ページ。みんなで話し合おうというところで、強調されているのですけれども、そこで先生が、こういうふうにおっしゃっています。「はるさんが１を当てはめた気持ちがわかる人はいますか。」と、先生と子供のやりとりじゃなくて、そのお子さんがどういうふうに考えたのかというのを他の子に投げかけています。守口の先生方も子供どうしをつなぐ取り組みもされているということで、記載されていてよかったなというふうに思います。

＜副委員長＞どの教科書も生活に生かすというのがあるのかなという視点で見させていただきました。特に割合のところがとても子供たち苦手ですので、５年生の教育出版１８１ページ、それから東京書籍の下８０ページ、あとは大日本図書が１７０ページ、子供たちが学んだことをどうやって生かすか、どのような興味づけをされているのかなと、例えば教育出版は、お得な買い方を考えよう、子供たちもわりと安いのをもとめるところもありますので、興味づけをされています。東京書籍も生かしてみようということで、特売日があって、そこでどれが一番安いかということで設定しておられます。ほかのところは、わりと確かめようとかいうのが多かったなと思います。大日本図書も１７０ページ、どの割引券を使おうかなという感じであったので、やはり子供たちが学んだことを正確に生かせるように、教育出版と東京書籍が比較的興味づけという点ではいいような教材を使っていただいているように思いました。

＜委員＞　今のお話でいきますと、教育出版は、６年生の２４６ページを見ると、算数でその後使えるものというところで、ふだん生活の中で、こんなものがあるよという応用が書いてあって、例えば２５０ページの今は必須ですけれども、安全パスワードを考えようというところで、パスワードで１万通りぐらいあるんだよと書いてあったりとか、算数が生活に必ず密着しているんだということを書いてあるというのがおもしろいなというふうに思いました。

あと、学校図書なのですけれども、ワンサイズ横に広い。実はこれ印刷の加減でよくあるのですが、見開くと閉じないという教科書なのです。ほかの教科書は開くと閉じちゃうんですけれども、横に広がってるのですね。これって、少し工夫されていると、印刷をよく考えてるなと思いまし

た。学校図書、６年生だけ中学校への架け橋の別冊で、これはいいのかどうか少しわからないんですけれども、こういうのも抜き出してやられているというのは、工夫されているなということを思いました。

日本文教出版も６年生ですが、２４１ページの算数マイトライの、じっくりチェック、ぐっとチャレンジ、ぐっとジャンルというところ。自分に合わせてチャレンジする、クイズとは言いませんが算数のゲームっぽくつくられているのが巻末のほうにあるので、実際の授業でどうなっているのかよくわからないんですけれども、こういうのがあると興味がある子はやるんじゃないかなという感じはしました。

あと東京書籍は、レイアウト的にみんな同じような感じなのですけれども、さっと斜め読みしたらほかのところに比べると、少し難しいなという感じがしました。

＜委員長＞　目次のところをどの教科書を見てもらってもわかるのですが、やはり今の学習指導要領では、スパイラルということがよく言われています。前の学年でどこまでやったの、次の学年はどうするのというところがはっきりと書かれているのが大日本図書と東京書籍かなと思います。あとは書かれているのですけれども、次につながるところだけとか、前の学年だけという、片方だけしか書かれていない、目次のところですよ。そういうところもやはりスパイラルという意識づけからいくと、これがいいのかなとは思います。

＜委員＞　６年生を見たのですが、最初のほうにノートの書き方というのが載っています。例えば大日本図書を見ますとノートの書き方が載っていまして、これがめあて、振り返りという形になっていました。内容的には、東京書籍とか、教育出版とかも悪くはないんですけれども、振り返りと、めあてという形で掲示されてのこのノートかなというふうに思いました。内容的には、教育出版とか、東京書籍もしっかりノートの書き方が書いていました。例えば教育出版のほうのノートの書き方は、２６、２７ページです。東京書籍は４ページに載っています。日本文教出版だけ少し見当たらなかったのですが、見てましたらノートの書き方として学校に合っているのは大日本図書かなと思いました。

＜委員＞　啓林館の６年生２３４ページに、「ひろがる算数」とあるのです。算数は、当然身近なかかわりという、子供たちも興味を持っていることは、とても大事だと思うんですけれども、調査報告書にもありますように、キャリア教育という観点からしても、例えば野老朝雄（ところあさお）さんという方が、アートと算数はどういうかかわりがあるかと、こういうのが興味深く載っていることで、子供たちも大変興味を持って取り組むというふうに思います。

＜委員＞　同じく啓林館の１年生の１３８ページを見ていただくと、先ほども話があったのですが、どうやって生かすのというところで、学びを生かそう、探してみようと書かれていますが、その中にバス運転系統一覧とあるのです。あまたのバス停の中で、守口市が書かれてあるので、守口が載っていたら、みんな使ったことある感じになるのかなと、そんなふうに思いました。学びを生かそうという欄があったのでいいかなと思いました。

＜委員長＞　日本文教出版の１８２ページ。少子高齢化のところから人口統計図、これが載っているのですね。これを子供たちが知るというところもまた一つなのかなと。要するに新たに組み合わせとか、順列とかが入ってきていると思うのですが、そこでこの図というのは、子供たちにとっては、中学校へ上がるときに、ある部分インパクトがあるのかなというのは少し思いました。

＜委員＞　少し重複するのですが、ざっといろいろお聞きしていまして、特に教育出版は全体的に子供たちが最初に課題と出会ったときの興味、関心というか、そのあたりをすごく高めようとする努力が各単元の初めに設定され、「何でかな？」と思うような仕掛けが随所に見られるなというのと、もう１点は身近な生活に最後に返していくようなところが各単元の最初に可能な限り設定されて

いるなというふうに感じました。
東京書籍のほうについては、教える側の教員にとっても、こういうふうに進めていけばいいんだなというのが非常に丁寧に記述されているようなところがいい点かなというふうに感じました。

＜委員＞　来年度の小学校からプログラミング教育というのが入ってきます。プログラミング教育と申しますのは、児童がプログラミングを体験しながらコンピューターに指示した動きをさせるという考え方でございます。日本文教出版の５年生の下６１ページですが、新学習指導要領にも算数では、例えば正多角形の単元でプログラミングを教えなさいという例示がされています。要は、プログラミング、これはスクラッチというものを使用しているのですけれども、プログラミングをしながら四角形を描いたり、三角形を描いたり、あるいは何十角形を描いたりというのを、子供たちは実際コンパス等ではできない、そういう多角形を描くというのが例示されています。全部確認しましたところ、他者さんは１ページから２ページ、日本文教出版は４ページ使っています。日本文教出版はｗｅｂというネットに全てつながるそういう教材が入っているということで載っていますので、この辺りはプログラミングについては他者と大きく差はないかなと思います。

＜委員長＞　それでは、いろいろ意見を出していただきましたが、なかなか難しいと思いますけれども、出てきた意見の量であったりとか、内容であったりとか、いろんな課題を加味させていただきながら、種類分けの提案をさせてもらいます。
算数の意見が多かった「最もふさわしい教科書」という教科書には、東京書籍と教育出版、次に、御意見等があった「よりふさわしい教科書」ということで、学校図書、日本文教出版で、「ふさわしい教科書」としては、大日本図書と啓林館というふうに２者ずつに分けさせていただきたいなというふうに思いますが、御異議どうでしょうか。
（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　御異議がないようですので、算数について終わらせていただきます。

【理科】

＜委員長＞　それでは、御意見のほうをよろしくお願いいたします。

＜委員＞　啓林館に、おもしろい付録みたいなものがついてまして、月の満ち欠けモデルをの使い方。こういうふうなのがついているのが少しおもしろいなと思いました。

＜委員長＞　全学年にはついてないですけど、中にカードとか、どこかの学年はプログラミングカードみたいなものがあります。

＜委員＞　今のと一緒で啓林館、今、委員おっしゃられたその次のページ、プログラミング的思考というのが書かれていまして、当然理科の電気の流れのところで、プログラミングを学習するということは明示されていますので、これもすごくわかりやすいかなというふうに思います。

＜副委員長＞理科の学力テストに植物の問題が出て、条件を変えることによって、植物がどう成長するのか、条件においてかなり変わっていくんだということを自分で選択して選ばなければいけなかったのです。そこのところで東京書籍と啓林館ですけれども、東京書籍は６年５６ページで、啓林館は６年生の４８ページ。まず東京書籍は非常に子供たちが問題、予想、実験でまとめというのがはっきりわかりやすく書かれているので流れがよくわかります。
啓林館のよさは、一つの実験の結果で、５０ページなのですが、これは他者と全く違うのです。「水が植物に取り入れられるということがわかりましたね」で、そこからもっと知りたいことはありませんかということで、啓林館だけはもっと知りたいというのをまとめの次に持ってきているのです。もっと知りたいが次の問題につながっているのです。ほかの発行社は全部まとめて終

わっているのですけれども。子供というのは、一つの結果から、何でだろうというふうに予想を立てるというのはとても大事なことなので、啓林館は、もっとそこから知りたいことはありませんかという感じでもっていかれているのが非常に思考がよくなるなと、また、理科の実験というのは、自分たちが実験したら必ず結果がそう出るとは限らないんです。そこが先生たちのすごく大変なところです。そこもきちんと予想と結果が違うのはどうしてかな、というところを啓林館はよく書かれているなというふうに思いました。

＜委員長＞　３年生なのですけれども、東京書籍と大日本図書。この２者だけが理科の学び方というのからスタートしているのですね。小学校の理科というのは、生活科から３年生になって理科と社会へ分かれていきますので、東京書籍と大日本図書だけは、それをあえて意識するような感じで、理科の学び方というのを一番最初に入れています。ほかの教科書も３年生で学ぶことというのはまとめてあると思うんですけれども、理科全体ということと言われたら東京書籍と大日本図書かなと。

＜委員＞　先ほど副委員長の御意見と重複するのですが、理科で特に大事な点、実験、観察のところかなというふうに思うのですが、各者のものの燃え方と空気という、６年生の最初の単元をずっと比べて見ていたのですが、予想して実験をして結果を出してまとめていく。また問題に出会って予想してと、学習の流れが明確なのは、私も東京書籍と啓林館の２者が非常にわかりやすいなと。そこを比べて、啓林館については、問題の設定の仕方が他者よりも子供たちが非常に予想が立てやすいような発問になっています。例えば物の燃え方の一番最初なのですが、他者で例えば問題の「集気びんの中でろうそくを燃やし続けるにはどうすればよいのだろうか」、こういう設定の仕方が複数者あるのですが、啓林館の場合は、「缶の下のほうにも穴をあけるとよく燃えるのは空気とどんな関係があるのだろうか」というふうに、もう少し具体化、子供たちはこんな感じでというふうな予想をするような、こういうところが少し他者より予想が立てやすいなということです。また、結果が出てまとめた後、色使いもあるのかと思うのですが、次の問題も基本スムーズに構成されているような感じを受けました。特に観察、実験の授業では最初から答えが書いていますので教科書を使いません。一連の学習を通した後、子供たちがもう１回見たときに、こういうことを確認していたのだなというのが非常にわかりやすいかなというふうに思いました。

＜委員＞　教育出版ですけれども、先ほどから予習、復習のスパイラルの話があったのですが、学習のつながりのところで、教育出版は、センテンスの前に、４年、６年とあと中学生までつながってますよみたいなことが書かれています。全ては見切れていないですけれども、ほかのところは、なかったような気がしたのですが、教育出版は、中学まで示しているところが今までになかったなという気がしました。教育出版は、百科事典っぽく、見てて楽しいものがありました。そして、教科書というよりか、そういうものに近いかなという感じがしました。あと、理科の教科書の表題が「わくわく」とか、「みんなと学ぶ」、「新しい」とか、「楽しい」とか、よくありふれたものなのですけれども、教育出版だけは「未来をひらく」と、これだけ文章になっているので、少しセンスが違うなというふうに思いました。

＜委員＞　私も理科が結構好きで教科書を見ていたのですが、啓林館のほうがすごく内容的にわかりやすいなと思いました。あと、写真がすごくきれいなと思ったのは大日本図書と、学校図書で、東京書籍の６年生の１７ページの風船を空に飛ばしている姿があって、少し環境破壊をする写真を載せているのが私個人的にはすごく嫌だったので、子供にもそういう教育をしていますので、環境破壊をすることはだめよと教えているのに、このように教科書に載せてもらったら嫌だと少し思いました。

＜委員＞　学校図書ですが、表紙がほかの発行者さんと違って、科学者が載っているということがやはり興味を持つ子は、さらにもっと頑張って勉強していくだろうなと思いますし、調査報告書にも書か

れていますが、５年生の６ページには振り子の運動というところで、実際振り子の法則が見つかった、そういうことを追体験できるようなところもありますので、いいかなと思います。

＜委員長＞　あと表紙といったら、学校図書だけ裏表紙の表１ですね。

＜委員＞　東京書籍、先ほど委員長からもありましたけれども、生活科との兼ね合いということで、最初に調査報告書にも「何々しよう」とか、「種をまこう」とか、「飛び出そう」とか、何か子供たちが最初に入りやすい感じになっているなと思いました。

＜委員長＞　それではいろいろ意見が出てきたのですけれども、理科の教科書について分けていきたいと思います。

それでは、５者ありますので、理科については、特にたくさんの御意見がありました「最もふさわしい教科書」ということで東京書籍と啓林館。「よりふさわしい教科書」ということで残りの大日本図書、学校図書、教育出版ということで、この二通りに分けるということでよろしいでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　御異議がないようですので、これで理科を終わりたいと思います。

【生活】

＜委員長＞　生活科のほうへ入りたいと思います。それでは、御意見のほうをよろしくお願いいたします。

＜委員＞　生活科というのは、やはりいろいろ子供たちが見つけてきて、それを発表するという場面が大変多くなります。どの教科書がいいかも電子黒板、タブレット、書画カメラが絵で入っておりますが、使い方という、一応本市の状況でいきますと、普通教室は、全て書画カメラ、電子黒板、タブレットも入っております。パソコンも入っておりますので、使い方が詳しく書いているところで見ますと、東京書籍の下の１２８ページにデジタルカメラ、タブレット、コンピューターというのが詳しく書かれています。それと合わせて教育出版の下１２３ページからも同じくデジタルカメラとタブレットとパソコンの使い方と申しますか、丁寧に扱いましょうということが書かれています。

＜委員＞　２年生の最後、自分について調べようというところがあって、そこで一番先生が悩むのは、いろんな家庭の中で育ってきた子が小さいころの写真がないとか、それですごくこの単元で悩まれます。どんなふうに各教科書はそのようなところを考えながら作っているのかなという視点で見ました。やぱり２者は小さいころの写真がまだあるので、もう時代的に少し違うんじゃないかなと。いいなと思ったのが、特に東京書籍の下の９６ページ、「あしたへジャンプ」というところ。大きくなった自分のことを振り返ろうということで、学校生活から始まって、やぱり１年生に入ってからのことです。それが近くでは保育所、幼稚園というところで限定されているのがいいなと思っています。また、「ありがとうの気持ちを伝えよう」があるのが啓林館で東京書籍は「ありがとうを届けよう」と、自分が成長してきたのは決して１人じゃないよというとこら辺を最後に、ありがとうを届けようとお手紙を書くんですね。これは本校でも取り組んだのですけれども、参観でやったときにありがとうの気持ちを自分も書きました。保護者の方にも書いていただいて、こんなに成長したねと。そこで自己肯定感が低い子がとても多いので、自分ってこんなにたくさんの人に支えてもらったんだなというのを改めて感じて、涙を出す子もすごくいたので、とてもここは大事だなと思っています。ありがとうを届けようというのをきちんと入れている啓林館と東京書籍はすごく私はいいなと思いました。まだ、いまだに幼いころの写真を持ってきて、載せている出版者はもうどうかなと思いました。ほか、日本文教出版は、自分の成長のところで、外

国の子も入れているということはとてもいいなと、これから多様性の社会ですので、日本人の子じゃなくて、外国の子も入れておられるのはとてもいいなと思いました。

＜委員＞　いろんな多様性ということで、教育出版と言われていたのですけれども、教育出版の上の１９ページのところにも、今いろんな外国の子供たちも学んでいます。この教科書はいいかなというふうに思いました。

＜委員＞　東京書籍の上６４ページ、みんなで動物を飼おうという項目があるのですけれども、守口では、あんまり動物を飼わないと聞いたことがあります。これを教科書で使っているところ、この教科書を使用したときに、その単元を別の題材と代えられたらと思います。あと、大日本図書は、説明のところでもあったように、右端にきらきら言葉のところとか、上のほうがたくさんそれが入っているのですけれども、２７ページに、こども１１０番の家のマークがいろんなふうに表示されていたり、大人が見ていても知りたいなと思うような項目がたくさん載っているので、すごく興味が湧いたので、子供たちにとってもすごくいいかなと思いました。

教育出版のはしごに乗っかっている黒いキャラ、「コんガらガっち」のキャラなのですけれども、絵本のキャラクターなので、これを知ってる子供さんとか、お母さんがすごく身近に感じられると思いました。

＜委員＞　日本文教出版の上巻の１７ページ、他者さんにもあるのですけれども、身の周りの安全というところで、消火器、非常階段、ＡＥＤや、頭に頭巾をかぶる等、雷が鳴ったらどうするのかというのをよりほかよりも詳しく書かれているなというところで、今、こういうことは必須で学校で教えてほしいと思っているところですので、このような表記があるところはいいなと思いました。

あと大日本図書は、見てのとおり、表紙が立体感がある感じで、さわっていただいたらわかるのですけれども、これも工夫されているのと、絵本みたいな感じになっており、これも皆さん気づいていると思いますけれども、下巻の１１３ページ、ここに少しフィルムシートが入っていて、夜でも働いている人で、後ろを見ると、どんな人が働いているとかいう、すごい工夫されているなと、子供が興味持つかなというところがいいかなと思いました。

東京書籍の上巻の２５ページのほうも、少し危ないよというところの消防の記載がありました。

全体的なところでいきますと、私はＰＴＡをやっていると、地域の見守り隊の人等、すごく感謝をしていただきたいというのを学校で教えてほしいなと思っていて、今、なり手も少ない状況です。子供たちとの触れ合いをすごく楽しみにされているので、そういうのが表記されている教科書がいいなと思ったので、日本文教出版の１７ページのところ等に、全部載っているのですけれども、おばあさんが安全に気をつけてねとか声をかけているとか、吹き出しなので何とも言えないんですが、そういうところがあるのがいいなと思いました。

＜委員＞　学校図書なのですけれども、上下ともに最後に学び方図鑑というのがありまして、全部イラストになっているのですけれども、先ほどいただいた安全の定義、地震のときの対応とか、そういったものをまとめて書かれているので、子供たちもしっかり学びやすいかなというふうに思います。

＜委員長＞　生活科が入ってきて、前回の学習指導要領の改訂のときから、生活科ではスタートカリキュラムを必須であるとされています。その中で、やはり保護者としては生活科って理科や社会と違って、何をするのというところが私の年代であれば生活科は何をするのという、保護者が教育を見てなければ当然だと思うのですけれども、そうなったときに東京書籍、啓林館、日本文教出版、学校図書、教育出版、この５つの発行者は最初に「保護者の皆様へ」という説明文がついているのですね。生活科はこういうふうにして学ぶんですよと。量とかそういうのは違いますけれども、いわゆる生活科ってこんなのですよ、こんなのするのですよという説明が載っているのは、スタートカリキュラムという面から見ると、丁寧な対応だなというふうには思っています。

＜委員＞　教育出版の後ろのほうにある学びのポケットというのがあって、おもしろいかなと思いました。１３０ページの伝えようというところの、魔法の言葉とか、広がる言葉、こんなのもおもしろいなというふうに思いました。４番のところに覚えて安全という形で、よく子供たちに「いかのおすし」とか、「おかしも」とか、よく避難訓練で使ったりします。そういう言葉も少し載っていて、いいかなというふうに思いました。

＜委員＞　光村図書なのですけれども、とても親しみやすいイラストがあるのですが、例えば生活上の１１２ページから１２３ページまで、これ春、夏、秋の四季の移り変わりがとても子供たちも落ちついて見られるような書きぶりで絵が描いているのがいいなというふうに思いました。
それともう１点、先ほど委員長のほうからスタートカリキュラムというお話があったのですが、東京書籍と啓林館はスタートカリキュラムのページが少し大きさを変えて書かれていますし、啓林館は、例えば「学校大好きあいうえお」、東京書籍は「学校生活スタートで学校のいきいき」とか、こういうふうに大きさを変えて意識されて書かれているのがわかりやすいなと思いました。

＜委員＞　先ほどの委員長の御意見に補足なのですが、保護者の皆様へというメッセージの中に、教育出版の上６ページに保護者の皆様へがあるのですが、吹き出しに、つけたい力というか、ついてほしい力というのが整理されてわかりやすく工夫がされているなというふうに感じました。

＜委員長＞　いろいろ御意見等が出てきましたけれども、７者ありますので、なかなか分けるのは難しいですが、一応案として言わせていただきたいと思います。
守口市の子供たちに使う教科書として「最もふさわしい教科書」として、東京書籍、教育出版、啓林館のこの３者で、「よりふさわしい教科書」というところで、学校図書と日本文教出版で、「ふさわしい教科書」というところで、大日本図書と光村図書というところにしたいと思いますけれども、御異議ないでしょうか。
（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　それでは、御異議がないようですので、生活科は終了いたします。

【音楽】

＜委員長＞　それでは、音楽について御意見のほうをよろしくお願いいたします。

＜委員＞　教育出版の５年生の７ページのところに、スキルアップのところでラップがあるのですけれども、新しいことにもチャレンジされているような気がしました。

＜委員＞　教育芸術社の６年生の７４ページ、７５ページのところで、音の働き、役割について考えようというところで、少し変わっていておもしろいかなと。音の大切さというのもこれまでと少し取り組みが違うかなというふうに思いました。

＜委員＞　１つの教材で比べてみたいなと思いまして、教育出版の３年生１２ページに茶摘みの歌があります。教育芸術社は１４ページに茶摘み歌があるのですけれども、比べてみますと教科書会社の特徴があらわれているなと思いました。調査委員会の報告にもあるとおり、教育芸術社はめあてをきちんと示し、活かして歌いましょうとあります。恐らく教育芸術社は、日本の歌、みんなの歌ということで、子供たちに自由に想像させながら歌わせようという意図が読み取れるかなというふうに思いました。

＜委員長＞　どの歌にしても教育芸術社はどんな雰囲気で歌ってほしいのかなというのが載っているのですよ。こんな雰囲気で歌いましょうねとかいうのが曲の説明というか。教科書を教えるのではなく教科書で教えるので、全曲は多分歌わないことになると思うんです。そうしたときに、曲を選んだときに、こんな気持ちで歌いましょうねというところが教育芸術社のほうがより強調されています。

子供たちに例えば担任の先生が音楽の授業をするときに子供たちに言うところは、こういう感情でいきましょうねというのが指導しやすい雰囲気かなというふうには思いますね。

＜委員＞　委員長のおっしゃるとおり、教育芸術社のほうが例えば５年生でしたら表紙のところで、浅田真央さんを使っていたりとか、ワンピース歌舞伎とか使っていたりとか、そういうところがやはりいろんなところで子供の興味をひけるようにつくられています。教えるというか、楽しむという要素が多いなという気はしました。

＜委員＞　教育芸術社ですが、調査報告書にもあるように、全て巻末あたりに振り返りのページで、１年間でどういうことを目標とするのかというところだと思うのですが、今ざっと各学年のを見てみますと、６年間の系統性というのが確かによくわかります。この学年ではこういうところまでできるようにというところは先生にとっても非常にわかりやすいと感じました。

＜委員＞　６年生は、なかなか声変わりもありますし、歌を歌うのもなかなか難しいと思うんですけれども、音楽で思いを伝えようというところで少し比較してみたのです。教育芸術社は、５２ページに音楽で思いを伝えようと、教材を通してどういうふうに歌っていくかと、「仰げば尊し」とか、多分、卒業する時期なのですごくいいと思いますし、また教育出版のほうは、６年生４０ページなのですけれども、心で伝える、心をつなぐということで、音楽でできることって、多分これは、被災に遭ったところに音楽のボランティアで行かれた方の写真を載せているんじゃないかなと思うんです。そういう捉え方もあるんだなと、少し大きく教育出版は捉えて、たしか被災のときに歌われたのは「ふるさと」がとても多かったので、そういうとこら辺りを重きにされたのかなと思います。どちらもよさがあって、子供が学ぶのであればやはり教育芸術社のほうが身近なところかなと思います。でも捉え方は非常に教育出版のほうも音楽で復興できるというとこら辺りの違いがあるのはいいかなと思います。

＜委員長＞　学習指導要領では、「君が代」については、どの学年でも歌えるようにするものというふうになっているのですけれども、その取り扱い、１年から６年まで全て載ってはいます。二つの出版社において取り扱いの仕方が違います。要するに教育芸術社は、後ろ表紙を開いた必ずそのページに、教育出版は、後ろ表紙を開いて何ページか戻るという形で、そこの部分が発行者の思いといいますか、そういったものがあらわれています。どちらがいいかというのは、使っている側が考えることにありますが、その点で少し発行者の思いというのがあらわれているのかなと思いました。全て６学年とも載っている曲はめったにないと思います。

それでは、音楽のほうをまとめたいと思います。

音楽につきましては、２者ですので、前回の選定委員会で確認しましたように、最もふさわしい教科書を１者には絞らないということですので、教育出版、教育芸術社両者とも守口市の子供たちにとっては、「最もふさわしいもの」ということでいきたいと思いますがよろしいでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

それでは、御異議がないようですので、音楽はこれで終わりたいと思います。

【図画工作】

＜委員長＞　それでは、御意見のほうをよろしくお願いいたします。

＜委員＞　調査報告書の中に、日本文教出版の３・４年生の上、５８ページ、５９ページの絵の具の使い方がわかりやすいということで記載されていましたので、開隆堂の３・４年生上の５０ページ、５１ページ二つを見比べてみましたところ、報告書のとおり、色をまぜるということについては、すごくわかりやすいかなというふうに思いました。また、片付けについてチューブまで記載しているのが開隆堂ですので、学びの力をどこに入れるかということで、記載が少し違っているかな

というふうに思いました。

＜委員＞　開隆堂の５・６年生５７ページの一番巻末の下段のところです。例えば別の教科でプログラミング教育についてあったのですけれども、やはりＣＧを交えるべき話ではないかと思っていて、ＣＧについて書いてある表記が唯一これだけでした。コンピューターを活用してやってみようというところで、ＣＧとは言いませんが、アート的なこと、結構、今デジタルの画像というのは文化の中で主流とは言いませんが、はやっているというか、こういう世界から商業デザインなどほとんどコンピューターなので、せっかくプログラミング教育があるのでしたらそういうところも学ぶ機会があればいいなと思いましたので、開隆堂の５・６年の下巻のほうはよかったなと思いました。

＜委員＞　全体的に開隆堂のほうが道具の使い方が丁寧に載っていていいなと思いました。同じ６年生の後半のほうで、金づちの使い方とかドライバーの使い方、ここだけにおさまらない、ほかの分野でも活用できるようなところが載っていたなと感じたのと、同じ６年生の教科書なのですけれども、りゅうを見るページがあったりとか、墨絵をやってみようというページがあったりとか、小学生のものとは思えないような領域まで載せていて、やはり小学生ぐらいのときに触れるいろんな知識はすごく広がっていくと思うのでいいことだと思います。

＜委員＞　開隆堂のほうは学習のめあてと振り返りが、ほかよりきっちり書かれているなと、子供たちにもわかっていいんじゃないかなというふうに思いました。　それと３・４年生の下のところに、ひらめきコーナーがあったり、５６ページの発想を広げようということで、ひらめき、発想等、そういうのに力を入れてやっていていいかなと思いました。

＜委員＞　日本文教出版の５・６年生の上なのですけれども、実は５６ページ、５７ページで私２点御指摘したいんですけれども、まず１点は、５７ページに開隆堂はなかったと思うのですけれども、大阪の太陽の塔があって、親しみ深いかなと思いました。

２点目は、５６ページの左側にＳＤＧｓというのが持続可能な開発目標というのがここに記載されていて、今日的な課題になっていますので、ここで勉強することができるかなと思いました。

＜委員＞　日本文教出版の５・６年生下巻の１２、１３ページのところなのですけれども、平面で考えるんじゃなくて、立体的にものを考えて、だまし絵的な、トリックアート的なことを考えるというのは、今どきの小学生、ＹｏｕＴｕｂｅとかにもよく出てくる話だと思います。こういうのはすごく子供たちが興味を持つような気がします。

＜委員長＞　日本文教出版の５・６年の下の６３ページなのですけれども、そこにやはりインターネットの怖さというか、ＩＣＴの怖さが、図画工作なのに、そういうことに気をつけましょう、公開されている情報は全て正しいものとは限らないと、他人が傷ついたり、嫌がるようなことはしないとか、そういったことまで図画工作の中で触れられています。図２の教科とは少し違うところなのかもしれないですけれども、やはりネットを使うのは守口の子供たちは非常に機会が多いですから、そこでそういうところでも話ができるかなと思います。

＜委員＞　調査報告書では、主体的、多様的で深い学びが、日本文教出版の３・４年生上のひもひもワールドというのが挙がっていました。それと開隆堂は、３・４年生下のわくわくネイチャーランドということで、子供たちが主体的に、友達同士で対話しながらこのような造形的な活動を通して深めていくんだなと、両者とも特色ある題材を入れられているなというふうに思いました。

＜委員＞　両方の発行者共になのですが、いろんな児童作品の例がいろいろ挙げられていて載っていますが、そこにこういう思いで書きましたみたいなコメントが両者入っているので、その辺りは子供たちのいろんな発想を引き出すものになっていくのかなと思いました。比較すると、特に日本文教出版のほうがそのあたり充実しているかなというふうに感じました。

＜委員長＞　どちらの教科書も本当にこんなの学校でつくれるのかなというものもいっぱい載っていたり、こんなの家で作ったらおもしろいなという、工作芸術という意味では、どちらの教科書もわくわくするような題材がいっぱいあって、親は困るやろなと思います。どちらを選んでもこんなのつくりたいとか言われたら困るかなというような気もする豊富な資料がやはりいっぱい載っているような気がします。

それでは、図画工作につきましては、２者ということですので、「最もふさわしい教科書」に開隆堂、日本文教出版、両者を入れるということで分類したいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　そうしましたら、図画工作を終了したいと思います。

【家庭】

＜委員長＞　それでは、家庭科の御意見、よろしくお願いいたします。

＜委員＞　ミシンで縫うところを比較してみたのですけれども、東京書籍は６２ページで、開隆堂は３８ページなのです。大きな違いがあるかなと思いましたのは、東京書籍は、ミシン縫いのよさを見つけようということで、よさを見つけるということが目標になっているのですけれども、開隆堂は、なぜミシンで縫うのだろうという表記で、その目的を問うています。これは徹底していまして、実は開隆堂、その前の２２ページのところにも、「なぜかまどでするのだろう」と、このような書きぶりで、子供たちに話し合わせるというところが開隆堂の特徴で、東京書籍は、よさを見つけようという点で、勉強していくというのが大きな違いかなというふうに思います。

＜委員＞　先ほど違う教科でＳＤＧｓの話が出ていましたが、それに関して、東京書籍３２ページ、開隆堂５８ページで、お得な買い物とか、そのあたりがどちらも内容として取り扱われているのですが、東京書籍のほうの内容、表現等を見ると、買い物について学習という形で集められているので、違う視点から子供たちの買い物を補わせるようなことにつながるかなということと、買い物が社会の仕組みだけじゃなくて、持続可能な社会につながっていくんだというところのまとめ方も工夫されているなというふうに感じました。

＜委員＞　子供たちに調理実習は大事なので、特に日本のみそ汁等で、比較させていただいたら、開隆堂は４８ページで、東京書籍は４０ページ。東京書籍は学習の流れはホップステップ１・２・３と左に明確に載っていて、自分が考えていく流れをきちんと書いておられて、一番最初の、大きなみそ汁の写真がありますよね。これインパクトがすごくあります。何でこんなに大きく写したのかなと思いましたら、最終的に一番最初のみそ汁としゃけの写真が４７ページに栄養というところで、日本の伝統的な食事って栄養があるんだよというところに持っていっているのです。だからすごくこの写真がまた生きてるなと思います。開隆堂は余りそういうことをされていないんですけれども、開隆堂は、どちらかというと、いろんなおみそを調べようとかいう感じで、５７ページに各種のみそですね。少し興味づけるようなことが載っているなというところが、どちらもいい捉え方をされているなと思いました。

＜委員長＞　東京書籍は１０６ページのところで、ここにも主菜、副菜とか出ていますね。献立の立て方とか、栄養バランスチェック表とか、そういった形でいろんなものをつくったりとか計量のこととか、食育でいくと少し丁寧なのかなという感じはします。

＜委員＞　東京書籍の調理実習のところで言われていたのですけれども、栄養素の色分け、食育のところがすごくわかりやすく明示されているなと思いました。どちらのほうでもこれを見て、保護者とお話ができる内容の教科書になっています。

＜委員長＞　実際には、開隆堂にも１１２ページ、１１３ページ、栄養素の表があるのですけれども、開隆堂よりは東京書籍のほうが丁寧かなという感じです。

＜委員＞　両者ともあるのですけれども、東京書籍１１６ページから１２１ページ、冬を明るく暖かくと、開隆堂の６８ページから７１ページ、暖かい生活と同じような内容が確かにあるのですけれども、両方見ていきますと、冬場暖かく過ごすと、光熱費やらいろんなことがかかるので、省エネをして暮らしましょうというところなのですけれども、東京書籍の活動４、深めようというところで、みんなで意見を出し合って、僕らは何ができるかというのを書きましょうという流れがあって、開隆堂も同じように、振り返ろう、生活に生かそうとあるのですけれども、少し捉え方のところで、東京書籍のほうが、では、どうするというのをみんなに問いかけていて、加えてその内容がいいなと思いました。

＜委員＞　家庭科でこれを持ち寄るのかなと、開隆堂のいっしょにホットタイムで家族と一緒に暮らしましょうというような話があったので、東京書籍のほうにもあったのですけれども、開隆堂のほうの写真がすごくリアル感があるなと思いました。東京書籍のほうは確か絵だったような気がしたのですけれども。両者ともこういうのを捉え、大きく書いていただいて、開隆堂のほうがビジュアルがいいなというふうに思いました。

＜委員＞　先ほどから出ていますプログラミングなのですけれども、開隆堂の１２８ページ、１２９ページ、これは教科横断できるプログラミングを実施するということで、東京書籍のほうには少し見当たらなかったのですけれども、実際炊飯器についてプログラミングのよさというのを取り上げています。

それともう１点、開隆堂に絡んで、数値的なもので申し上げますと、府の選定資料の家庭科の１２ページなのですけれども、ＩＣＴの効果的な活用をするために、教育システムが東京書籍は１４、開隆堂が２９ということで、ＩＣＴ的には開隆堂のほうが多いかなと考えます。

＜委員＞　各単元の数字を見ていたのですが、例えば東京書籍でしたら１４ページ、最初の調理の一覧です。開隆堂でしたら１０ページ。まず東京書籍の方はいつも左上のほうに学習の流れというのがステップ１、ステップ２、ステップ３と、こういうことをやっていきましょうということを示されていまして、一方開隆堂は左下のほうに学習のめあて、調理をすることのよさを見つけると書かれています。開隆堂のほうは、調理の手順を知って、青菜や芋をゆでることができるというぐあいに、子供たちが何ができるようになればいいのかというのが非常にわかりやすいよさはあるかなというふうに感じました。

＜委員長＞　東京書籍は５０ページ。ものすごいインパクトのある汚い部屋の写真、これが教室の中でしたら、困っていると多分なるんだろうなと思います。家の片づけから掃除、学校の掃除とか、その辺りのところまでいろんな計画につながってくるのですけれども、開隆堂の場合は、２８ページで、部屋の整理整頓や、教室の整理整頓等、リサイクルがあって、なおかつ学校のところは、９０ページにクリーン作戦ということで分かれて載っています。そこが教科書のつくり方の違いで、小学校の先生でいくと、部屋の汚さから教室の掃除までつなげるのでしたら、東京書籍のほうが分かれていない分だけ、指導しやすい部分ではあるのかなと思いました。

＜委員＞　東京書籍でいきますと３２ページの４の継続可能な暮らし、物やお金の使い方というのと、開隆堂の生活を支えるお金と物というところがあるのですけれども、今度また税金が上がります。その中でもキャッシュレス化というのがあります。お金の払い方で、現金ではなくて、キャッシュレスで払うんですよみたいなことが東京書籍では３５ページのところに書いてあって、開隆堂のところでは６１ページのところで書いてあります。そんな中でも先ほどありましたけれどもインターネットの取引に注意しましょうというものが東京書籍では書いてあって、消費者センターと

はというところで、こういう便利な点もありますが、こういうことに気をつけようねというのが東京書籍のほうがより詳しく書いているように思いました。

＜委員長＞　そうしましたら意見が出たということで、まとめたいと思います。
家庭科につきましても、２者ということですので、「最もふさわしい教科書」を東京書籍、開隆堂ということで分類したいと思いますが、よろしいでしょうか。
（「異議なし」という声あり）
そうしましたら家庭科を終わりたいと思います。

【保健】

＜委員長＞　それでは御意見のほうをよろしくお願いします。

＜委員＞　東京書籍の３・４年生の３ページに、実は「けんこうを守る活動」ということで、学校で関係のある方々が載っていまして、スクールソーシャルワーカーというのが右下に載っているのです。ほかの４者は、スクールカウンセラーは載っているのですけれども、いわゆるＳＳＷは、東京書籍だけが載っています。本市の施策として小学校のほうにＳＳＷを派遣させていただいているので、少し本市と実態が合うかなというふうに思いました。

＜委員＞　学研教育みらいの教科書の５・６年生なのですけれども、心の発達というところ、心の健康という単元をずっと見ていて、いじめのこととかも書いてあったり、また自分のよいところを発見しようというふうなところもあったり、もし何かあったときには相談しようというところもあったり、いろんな場面が書いてあって、本当に子供たちのために詳しく書かれているのではないかなと思いました。

＜委員＞　けがのケアというところですけれども、本当に最近、熱中症とか、ＡＥＤの使い方ですよね。職員はできるようになっていますけれども、最近では中学生、小学校高学年でもできるようにということで言われていると思うんです。そういう意味では、東京書籍はすごく具体的に、熱中症だったら４５ページに、熱中症の予防と手当というのが書いてありますし、人が倒れたときにＡＥＤで自分ができることということが、非常に詳しく４６ページに書いていますし、心臓マッサージの写真も具体的に書いていて、これはすごくいいなと思いました。ほかのところを見たのですけれども、余りここまで詳しくは載っていないなというふうに思って、やはり自分たちがもし、誰かが倒れたときに、どういうことができるかというのがとても大事なことなので、東京書籍が非常にいいかなとは思いました。

＜委員＞　保健の指導時間が３・４年生の２年間で８時間、５・６年生の２年間で１６時間と、非常に限られた時間の中での指導になるので、その点から見ると、東京書籍、例えば５・６年生の２０ページ、けがの防止というところなのですけれども、２１ページの右上を見ると必ずこの学習の進め方というのが毎回毎回出てきます。あと２０ページの左下のほうに、いろんな教科と単元が整理されているので、他教科、教科等との横断的な学習の展開は指導する先生側からいうと非常に教えやすいのかなというふうに感じました。

＜委員＞　私は、犯罪被害の防止というところで見比べてみました。その中で、東京書籍の５・６年生の３４、３５ページのところです。ほかの教科書も同じようなことを書いているのですが、一番ケーススタディ的にみんなで話し合える時間を多くページを割いていました。学習時間が少ないという中、教科書を読むよりもみんなで話し合ったほうがより印象に残りますし、より犯罪から身を守れるようなことになるのではないかなというふうに思いました。

＜委員＞　光文書院なのですけれども、３・４年生の１５ページにスマートフォンやタブレットの使い方と

生活のリズムというページがありまして、やはりスマホの使い方、お風呂のときとか、寝る直前には使わないというふうにルールがあるのですけれども、実はもう１者、東京書籍のほうも３・４年生で４３ページに掲載されています。少し３・４年生でスマートフォンと健康について扱っているのはこの２者だけで、あとは５・６年生から学習するようになっています。本市の状況としても、やはり３・４年生からやっていくことも必要かなというふうに思いました。

＜委員長＞　ネット環境でいけば、この光文書院は、５・６年生の２９ページ、おそらくこの発行者だけなのですけれども、歩きスマホを取り扱っているのですね。もう小学生からこんなのを入れなあかん時代になってきたんかなというふうには思います。

さまざまな自然災害ということで、例えば東京書籍の３８ページに熊本地震、東北地震、阪神淡路大震災、この三つが載っています。この大きな三つの出来事が書いてあるのが東京書籍と、学研教育みらい教育みらいなのです。あとの３者は、一概的な地震とか、津波とかいう形でしているので、風化させない意味合いからは、具体の名前の入っているほうがわかりやすいかなと思いました。

＜委員＞　文教社なのですが、３・４年生の一番後ろに赤ちゃんの写真があり、すごいなというページがあります。こういうこともやはり命の学習をしていく中で大事かなというふうに思います。

＜委員＞　大日本図書ですけれども、先ほど学習の流れでいろいろ御意見があったと思うのですけれども、ここは話し合ってみよう、やってみようということで、実際子供たちが意見を言いながら実際にそれに取り組んでいこうという流れが徹底しているかなというふうに思いました。

＜委員長＞　そうしましたら、意見がないようですので、私のほうでまとめていきたいと思います。

そうしましたら、保健の教科書ですけれども、御意見等いろいろ量的な部分とか、内容的な部分も聞かせてもらいながら、「最もふさわしい教科書」とするものに東京書籍と学研教育みらい教育みらいさんの２者、「よりふさわしい教科書」というところで、ネット環境とかがありますので、光文書院、「ふさわしい教科書」、これは大日本図書と文教社というふうに三つに分類したいと思いますが、御異議ないでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　そうしましたら、保健を終わりたいと思います。

【英語】

＜委員長＞　それでは、御意見等よろしくお願いします。

＜委員＞　なぜ学校図書だけは１・２なのですかという疑問点があります。ほかは５・６なのに、ここが少し疑問に思うところです。

＜委員＞　そうですね。５年生、６年生で１冊ずつですね。

＜委員＞　５年、６年で１冊ずつです。だから１が５年で、２が６年だと思います。

＜委員＞　１時間とか２時間の単元で、これだけの項目ができるのかなというのがすごく思いました。相当速いペースでないと１冊いかないと思います。５年なので１時間だと思うのですが。

＜委員＞　年間７０時間あるので。量的にはそんなに多くはありません。

＜委員＞　そうですね。塾とか行かれている方も最近は多いんですけれども、塾に行っておられる子供さんと、行っておられない子供さんの格差がすごく出てしまっているんじゃないかなと思いますので、なるべくわかりやすく簡単にできる教科書はどれなのかなと思いながら見させていただきました。それだと東京書籍が絵が多くてわかりやすそうなイメージです。

＜委員＞　今の意見に関連するのですが、とにかく英語が不慣れで、少し不安のある子がいると思ったときに、東京書籍が別冊で、例えば習ったところのアルファベットとか、単語がざっと載っているこの冊子があります。ここは今学習しているページを開きながら、少し不安な子はこれも開いて、隣に並べながら学習できる、そういうよさはあるかなというふうに思いました。

＜委員長＞　その観点でいくと、別冊の中身にあるような一覧表の部分ですね。これが載っているのが三省堂と教育出版と啓林館です。それで開隆堂は中学校の教科書みたいに単語集が載っています。

＜委員＞　別冊でしたらぺらぺら見ながら説明するとかですね。

＜委員＞　先ほどおっしゃられたように、３・４年生は外国語活動ということで、５・６年生から教科書に触れていくという中で、最初に出会うのがやはり表紙裏かなというふうに私は思います。ここでいかに子供たちが興味を持って勉強してもらえたらなというふうに思うのですけれども、教育出版と三省堂と、光村図書は、世界の国々の方々が挨拶をされているというところから入ります。私が光村図書をめくると、さらに英語の世界へということで、英語を学ぶ目的というのを明確にここに出して、子供たちがしっかり目的を持って勉強していこうというふうな工夫があるかなというふうに思いました。

＜委員＞　開隆堂は、５年生、６年生も文末というか、単語配列があります。これは今の時点で目標を立てられるのは必要かなというふうに思っていますので、裏表紙をあけたところで、キーボードの大きさになっているので、非常にいいのではないかなと思いました。
それと全部の教科書に単語カードがついているのですね。ページの３分の１ぐらいは単語カードなのです。これを活用していくのかなと思います。その中でも学研教育みらいの単語カードが少し小さくて見にくいというところがあって、量はたくさんあるのですけれども、かた紙になってなかったり感じました。量があるのですけれども、はさみで切っていって、そこが少しほかと違うなと思いました。このカルタみたいなのは必須なのですかね。三省堂は、単語カードではなく、ローマ字のカードみたいになっていて、その裏に自分で書き込むようになっており、その辺りが少しほかと違うなというふうな感じがしました。

＜委員長＞　三省堂の場合は、この続きで、ローマ字は切り取って使えるようになっているのですね。

＜委員＞　これは必須なのですかね、この単語カードみたいなのをつけるというのは。工夫ですか。

＜委員＞　いろんなパターンの単語カードがついています。

＜副委員長＞本校５・６年生は、最近では、英語で、おもしろいなと思ったのが七夕の願い事を日本語で書いて、何になりたいとか、それを英語で書いてお互い言うという、何か非常に楽しんでやっていました。それにはいろんな言葉を知っておかないといけないという意味で、「Ｉ　ｃａｎ」というところで、三省堂の２６ページに、要するに何ができるかという、最初の絵なのですけれども、かなりたくさん絵が描かれていて、大体５年生の子供たちになったら、やはり例えば水泳ができるとか、わりとスポーツが多いのですよね。そういう意味でわりと子供に沿った絵が描かれてあるかなというふうに思いました。ほかのところは結構遊び、例えば啓林館でしたら「Ｉ　ｃａｎ」の絵表紙、わりと遊びを中心にやっていたりとか、教育出版は日常生活みたいなのがあるので、どちらかというと三省堂の「Ｉ　ｃａｎ」がすごく身近かなと思いました。三省堂は必ず聞く、それからアルファベットを書くというのもきちんと入れていますし、アルファベットの必ず最後に入っているので少し使いやすいかなと思いました。三省堂が子供たちには親しみやすいし、入りやすいかなと思いました。

＜委員＞　私も今の副委員長の意見と同様なのですけれども、三省堂のほうは、ホップ・ステップ・ジャンプという流れで、聞く・話す・読む・書く活動は本当にスムーズに進むのではないかなというふうに教科書を拝見して思いました。

＜委員＞　学校図書の１の９４ページなのですけれども、英文の書き方というところで、先ほど委員のほうから単語表の件があったのですけれども、一応学習指導要領上は、５・６年生で６００から７００語程度扱うものとするということで書かれているのですけれども、書く活動としてもやはりこういう丁寧な記載があるというのは教えるほうからしても、学ぶほうからしてもわかりやすいんじゃないかなというふうに思いました。

＜委員＞　学校図書の１で、最初にメンバー紹介があり、５年１組のクラスメイトがあって、いろんなキャラクターが載っているのですけれども、彼らがこの教科書の中でいろんなことを展開していくのですけれども、この子たちが何をするのだろというので、いろいろな、後にめくっていくたびに楽しそうになってきている気がしました。何かストーリーをつくってあげると、教科書では、どうしても点々と分断されるけれども、この子たちがいたら教科書が流れているような感じがしました。ほかのところもあるのですけれども、よりこの集合写真を入れているところとかが仲間としての一体感みたいなのがあって、構成がいいんじゃないかなというふうに思いました。

＜委員＞　教育出版のほうですが、他者も取り扱っているのですが、例えば５年生の２４ページ、「Ｗｈｅｎ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｂｉｒｔｈｄａｙ？」というところ。これも本当にいろんな国が取り上げられていますので、同様に例えば３４ページ、「Ｉ　ｈａｖｅ　Ｐ．Ｅ．ｏｎ　Ｍｏｎｄａｙ」というところにもいろいろな国が取り上げられていて、非常に英語力を、アメリカとかばかりになるところですが、いろんな国を取り上げられているのが非常に丁寧だなという印象を受けました。

＜委員長＞　先ほど副委員長のほうから七夕の話がありましたけれども、教育出版の６年生の巻末ですけれども、いろいろと中学校で学習したことであったり、自分の思い出であったりとか、本になったりとか、切り取って、みんなで何かをつくっていきましょうというか、後ろのほうですので、自分の学校行事の思い出を書きましょうとか、好きなスポーツ選手を紹介しましょうとか、案内をつくっていきましょうとかいう、言ってみたらコミュニケーションですね。今の例でいくと、相手に伝わることが第一になりますから、文法でもこういう形をつなげていくという意味合いでは、最後の最後で中学校に上がる前に文法を気にせずやっていきましょうかというところで、後ろにいろんなパターンが書いてありますから、これはいいことかなというふうには思います。使うのは難しいかもしれないですけれども。

＜委員＞　東京書籍の６年生の８５ページにお薦めの英語メモというのがありまして、実際日本の本もたくさん読まないといけないんですけど。英語の本についても子供たちが興味が持てるかなと思います。それでほかに載っていないか少し確認しましたところ、三省堂の９１ページにも、写真しかないのですけれども、２者は載っていました。ほかは題材の中で、例えば光村図書はジンジャーブレッドというのと、教育出版だとガマガエルというのもありましたけれども、本の紹介として載っているのは、三省堂と東京書籍です。

＜委員長＞　そうしましたら、新たな教科、新たな教科書ということですので、なかなか難しい分野はあると思うんですけれども、分けさせていただきます。「最もふさわしい教科書」ということで、東京書籍、三省堂、教育出版、「よりふさわしい教科書」ということで、開隆堂、学校図書、光村図書、啓林館ということで、三つに分けるのではなく、二つということで分けさせてもらいたいなというふうに思うんですが、いかがでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　御異議がないようですので、英語を終わりたいと思います。

【道徳】

＜委員長＞　それでは御意見のほうをよろしくお願いします。

まず、事務局に確認ですけれども、別冊があるのは、日本文教出版と、学校図書と、廣済堂あかつき、この３者ですか。

＜事務局＞　そのとおりです。

＜委員＞　本校も道徳科に取組んで３年間、道徳ノートがついている教科書については、それに縛られてしまうので、やはり子供たちの心の引き出しをもっと広くするには、子供の実態に合わせた道徳ノートを本校でもプリントにして刷ってますので、そういう意味では、道徳ノートはないほうが私はいいと思っています。

あと、東京書籍と廣済堂あかつきは、教材もいいですし、教材の最後に二つの質問を考えようということでたくさん載せていないんですね。だから余り多過ぎると子供たち考えにくいので、私たちの質問はいつも二つに絞って問うことで、そこからもっと深い質問になってくるので、そういう形がいいかなと思っています。

光文書院のいいところは、ことわざが結構載っているのです。ことわざとか結構子供たち知らないと思うんですけれども、少しそこを載せていたりとか、工夫もされていて、言葉の宝船、親しき仲にも礼儀ありとか、日本にもすごくいいことわざとか、論語とか、触れる機会がないので、私はいいなと思って、子供たちに使えると思います。

あと付録ということで、いろんな工夫をされています。付録も読むだけなのですけれども、心にしみ入る言葉ものもあるので、光文書院はいいなと感じました。

＜委員＞　光文書院を私も読んでいていいなと思ったところが、７４ページにいじめに関係するところがあります。また、次に情報モラルということで、７８ページにグループはずし。最近よくあるＬＩＮＥはずし等、それに関係するような内容のものがあって、今の子供にとってすごい大事だなというふうに思いますので、これの内容はいいなと思います。

＜委員＞　日本文教出版の１５４ページの山中教授のＩＰＳ細胞の話なのですけれども、例をあげますと、日本文教出版は、全てにサブタイトルがあって、この話し合いの中で、ＩＰＳ細胞であれば終わりなき挑戦というようなことが書いてあって、読んでいくと、山中教授がどのような体験でやっているのかなというのが書かれています。それを別冊のほうを見ると、文字で書いたらどうなるのかというのをそのまま書いてあります。例えば成功イコール完成ではないと考えているのは、どんな思いからでしょうかという、こういうようなことを文字にして書くと、そのことがよくわかるのではないかなというふうに思いました。全てにおいてそのような感じになっているので、読みやすいなというふうに思いました。

学校図書だけじゃないと思うのですけれども、この別冊の、５２ページのところで、保護者の皆様へ、道徳なので、この本で何を子供たちに学ばせたいのかというのを書いているというところです、少しかたい内容のことをいろいろ書いていありますけれども、保護者の方も教科書で何を学んでいるのかなというのを、また、どういう思いで教科書に出ているのかなというのがわかるので、保護者としては安心されるのではないかなというふうに思いました。

あと光文書院のほうで、６年生の５２ページのところなのですけれども、携帯電話のこと、スマートフォンの使用時間、小学生と中学生の対応と、道徳とはどういうふうに関係するのかなと思うのですけれども、このような資料がついていると、道徳の難しい文章でする感じが取り払われるような感じがします。特に光文書院はいろんな資料が入っているので、途中でパラリンピックとかもそうですし、バスケット、こんなのやっているよとかもありますし、資料として充実しているなというふうに思いました。光文書院の最後なのですけれども、学びの足跡というところで、

別冊にはなりますけれども、こういう表がついていて、ここに自分で何を学んで何をしたというのを全部書いて、心の矢印というのがすごく微妙な書き方なのですけれども、こういうのを子供たちに書かせるというのはいいではないかと思いました。

＜委員長＞　このように教科書の中にこの単元でどういうことを学びましたかということが教科書の中に入っているのは、光村図書と東京書籍で、どの学年もそうです。なお、東京書籍は後ろですが、光村図書は途中、間に振り返り的なものが入っています。

＜委員＞　光村図書なのですけれども、例えば道徳の４年生の１５６ページ、「なしの実　アンリ・ファーブル」という教材があるのですけれども、先ほど委員長もおっしゃられたように、発問は二つ程度ということなのですが、これも１５９ページを見ますと、考えよう、話し合おうというところで、ここを重点的に３点、さらにつなげようということで本を紹介しているというところが特徴的かなというふうに思います。

＜委員＞　教育出版なのですけれども、少し道徳の話とはずれるのですけれども、調査報告にもあるように、３年生、１３５ページに守口大根が伝統野菜として取り上げられているというところが身近でいいかなというふうに思いました。

＜委員長＞　私のほうから少し聞きたいんです。例えば学研教育みらいの１年生の１６、１７をあけていただくと、小学校１年生で４月の終わりにこれぐらいの小さい字を読むんですか。疑問に思いました。

＜副委員長＞多分これをするのであれば、一つの画面を書画カメラで大きくしてあげてやるのかなと思います。

＜委員長＞　なるほど、そういう感じですね。

＜委員＞　東京書籍の１年生の１０９ページなのですけれども、１年生の終わりかなというときに、１年何組のいいところ探しという、道徳の中身とは関係ないんですけれども、学級活動をする上でこれは使えるかなと思います。いろんな保育所、幼稚園から来た子たちが１年生ですので、こういうのも使わなくてもいい場面もあるかもしれないですけれども、あればまたそういう教材としてはいいのかなというふうに思います。

＜委員＞　教育出版の６年生の２ページのところに、一番大切なものを書きましょうと、一番最初に書き足して、毎回ここが見直せるというのは、いいのかなと思います。ほかのところは自分で書きましょうとか、ノートに書きましょうのように書いてあったのですけれども、教科書の一番前に書くというのは、毎回道徳が始まる時間に書いていたら集中してもらえるのかなというふうに思います。自分で一番最初に書いたから毎回見直されるのではないかなと思います。

あと同じく教育出版の１２０ページのところなのですけれども、卒業に向けてというところで、小学校を卒業されるときに、お世話になった方への感謝の気持ちをあらわしましょうで、学校でというのと、あと地域でというのがあるのですけれども、この地域というのは、ＰＴＡとか、コミュニティとかここに触れているところって学校の教科書になかったので、子供たちが、地元でコミュニティ活動ができるようなことを書いてもらったら非常にうれしく思います。

＜委員＞　学研教育みらいなのですけれども、学研教育みらいの編集趣意書にもＡ４版でゆったりと見やすいようにという趣旨で書かれてはいましたので、確かにほかの教科書よりは字が見やすかったなというふうに思います。

＜委員長＞　光村図書の４年生、９６、９７ページなのですけれども、ここでインターネット上のやりとりとか、スマホが取り扱われているのですね、中身とは関係ないんですけれども。小学校３年生までは余りないけれども、４年生になったら携帯を持つ割合がすごく上がるのですね。小学校１年に入学したときに上がる。次に上がるのは４年生というふうになっているのですね。学童がそこで切れてしまうということもあるのですけれども。そのときにちょうど４年生にこの時期にこれが入っているのは大分いいところに入れているのかなという気はします。ただ、道徳というのは、

３５時間あったとしても、指導すべきことの内容項目の数は３５もないですから、全ての教材をやらなくても、投げ込みでやりつつ、指導すべき内容項目を全部クリアした上で、違う内容もできますので、そういった意味では、こういう題材も入っているというのはいいことかなと思います。

＜委員＞　私も別冊ノートというのは、やはりそのときの指導によって工夫も必要なときがあるかと思いますので、余り縛られるようなノートはないほうが使いやすいのかなというふうに思います。

それともう１点、調査報告書にありますように、東京書籍がいじめについて、６年間にわたって２時間続きの課題で捉えておられるというのは、いじめというのが今非常に子供たちの命にかかわるような問題でもありますので、また身近でもありますので、非常に必要ないいことかなというふうに感じました。

＜委員＞　廣済堂あかつきなのですけれども、今、委員おっしゃられたように、別冊ノートは、例えば３年生の１２ページの「話し方、聞き方名人を目指そう」というところで、またその内容とは違ったよさを子供たちには見られるかなというふうに思います。

＜委員長＞　そうしましたら意見の量とか中身とか、その言葉の発言の趣旨とか、そういったこと、あと道徳ノートという部分もいろいろ御意見が、別冊の部分の御意見等もありましたので、それも加味しながら分類分けをしたいと思います。二つに分けるということはなかなか難しいですので三つに分けたいと思います。

まず「最もふさわしい教科書」については、東京書籍、光村図書、光文書院、「よりふさわしい教科書」については、学校図書、教育出版、日本文教出版、「ふさわしい教科書」につきましては、学研教育みらい教育みらいさんと廣済堂あかつきにしたいと思いますが、御異議どうでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

＜委員長＞　よろしいですか。御異議がないようですので、道徳を終わりたいと思います。